

令和4年度 学校経営方針

『人にやさしい 人がやさしい 幸せな学校』を目指して

1 学校経営基盤

新学習指導要領前文は、次のように記している。

教育は、教育基本法第1条に定めるとおり、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期すという目的のもと、同法第2条に掲げる次の目標を達成するよう行われなければならない。

- 1 幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い、豊かな情操と道徳心を培うとともに、健やかな身体を養うこと。
- 2 個人の価値を尊重して、その能力を伸ばし、創造性を培い、自主及び自律の精神を養うとともに、職業及び生活との関連を重視し、勤労を重んずる態度を養うこと。
- 3 正義と責任、男女の平等、自他の敬愛と協力を重んずるとともに、公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと。
- 4 生命を尊び、自然を大切にし、環境の保全に寄与する態度を養うこと。
- 5 伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。

これからの学校には、こうした教育の目的及び目標の達成を目指しつつ、一人一人の児童が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。このために必要な教育の在り方を具体化するのが、各学校において教育の内容等を組織的かつ計画的に組み立てた教育課程である。

教育課程を通して、これからの時代に求められる教育を実現していくためには、よりよい学校教育を通してよりよい社会を創るという理念を学校と社会とが共有し、それぞれの学校において必要な学習内容をどのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようにするのかを教育課程において明確にししながら、社会との連携及び協働によりその実現を図っていくという、社会に開かれた教育課程の実現が重要となる。

学習指導要領とは、こうした理念の実現に向けて必要となる教育課程の基準を大綱的に定めるものである。学習指導要領が果たす役割の一つは、公の性質を有する学校における教育水準を全国的に確保することである。また、各学校がその特色を生かして創意工夫を重ね、長年にわたり積み重ねられてきた教育実践や学術研究の蓄積を生かしながら、児童や地域の現状や課題を捉え、家庭や地域社会と協力して、学習指導要領を踏まえた教育活動の更なる充実を図っていくことも重要である。

児童が学ぶことの意義を実感できる環境を整え、一人一人の資質・能力を伸ばせるようにしていくことは、教職員をはじめとする学校関係者はもとより、家庭や地域の人々も含め、様々な立場から児童や学校に関わる全ての大人に期待される役割である。幼児期の教育の基礎の上に、中学校以降の教育や生涯にわたる学習とのつながりを見通しながら、児童の学習

令和2年度より全面実施された学習指導要領では、これまでなかった前文が追記され教育基本法の理念等を実施していく上の考え方が提示されている。キーワードとしては、「持続可能な社会の創り手」、「社会に開かれた教育課程」、「学ぶことの意義を実感できる環境を整えることは子どもと関わる大人の役割」等が示されており、本校の教育課程もこの前文の意図を大切に、新たな学校づくりに全職員で取り組んでいる。

平成とともに開校した本校は、本年度で創立34年目となる。創立以来「健康でがんばる子」の校訓のもと、平成25年度には、「ユネスコスクール」に認定されている。学校教育目標は、「あたらしい自分をつくる ぼく・わたし」とし、児童が主体的に生き生きと授業や活動に向かったり、新しいことを創造したりすることを通して、「自分のよさや可能性を認識する姿」を大切にしている。このことは、前文にも示されている「豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手」を育てる、E S Dの理念と結び付

いている。

本校の特色としては、長年継続されている取組の一つである「けやき学習」が実践されている。「けやき学習」とは、本校における生活科も含め、総合的な学習の時間の総称である。学級ごとに子どもの思いによる単元を構成し、「よりよい未来を創っていくために、学び考え行動する子」を目指し、子ども主体に展開する学習である。昨年度は全国生活科・総合的学習教育学会主催の全国大会が富士市で開催され、コロナの影響で授業の公開はなかったが、本校のこれまでの取組を全国に発信するよい機会となった。

不透明で予測困難な社会を生きていく子どもたちに対し、私たち教師はユネスコスクールとしてE S Dを推進し、E S Dの視点をもって学習を見直し、本校ならではの教育を実践している。子どもたちが活気にあふれ、それぞれが夢をもち、互いに温かく関わり合い高め合いながら自分の夢に向かって生き生きと学び、主体的に考え活動していく学校を目指している。また、子どもが安心して自分の思いを表現できる環境づくりとして、「人にやさしい 人がやさしい」を重点目標に、温かい、幸せな学校づくりをキーワードとして、校内のみならず保護者地域にもこの言葉は浸透してきている。

ここ2年間は、新型コロナウイルスの影響で、社会も学校も機能がストップし、従来の活動が大きく制限された。しかし、学校の主軸を児童の命と感染対策に置くことで、制約されることも多かったが、新たな発見も多くあった。これまでの活動を見直し、本質を見つめ直すことで、大切な人の命、人の心、人とのかかわりなど、いつの時代も変わらぬ大切なこと(不易)を考えるきっかけとなった。「誰のため?」、「何のため?」と問い掛けることで、「手段」が「目的」化されていたことや、「学校でしか通用しない当たり前」の見直しにもつながった。本校では、一昨年度から、「一度やめたことは、新しい発想で作り直す。」「決して同じものは建てない(作らない。)」という考えのもと学校改革を進めている。また、児童も教職員も、「ゆとり」を大切に、「常に20%のゆとりをつくる。(20%のゆとりが主体性を生む。)」という考えのもと、子どもを追い立てない、個々の児童の主体性を大切にしてきた。今後も子どもたちが、人、モノ、コトと温かく関わり、自ら考え、正しく判断し、進んで行動することができる力を伸ばし、自己肯定感(自己受容感)・自己有用感を高めていきたい。

教育改革としては、G I G Aスクール構想(ICTの活用)や「令和の日本型学校教育」の構築を目指して~全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現~(答申)等をもとに、学校は「ある」ものでなく、「つくる」もの、私たち教職員、学校が新しい教育の流れにも的確に対応し、これからの社会を生きる子どもたちの持続可能な学校の構築(サステナブル経営)を図っていきたい。

「人にやさしい 人がやさしい 幸せな学校」づくりの3年目として、「人にやさしいとはどんなことか?」、「幸せとは何か?」、「生きるとは何か?」など、教育的な観点のみにとどまらず、「哲学」、「脳科学」、「心理学」、「経済学」、「法律学」等の観点からも学校づくりを総合的に見直し、子どもと共に考えていきたい。子どもが自らを育てる学校でありたい。

2 めざす学校像 主体的に学び・活動していく学校 地域と育てる学校

3 めざす子ども像 岩松中校区 9年間で目指す子ども像
い・・・ いつでも自分から動く子
わ・・・ わたしもあなたも大事にする子
ま・・・ 学びを楽しみ、表現する子
つ・・・ つながりから成長する子

4 学校経営目標 未来を拓く 子どもの育成

学校生活の中心となる授業を学校づくりの中核に据え、子どもが温かな集団の中で主体的に学びを深め、楽しむことができる学校をめざす。

(1)「あれっ」「なぜ」「確かめたい」「でも」などの問いが生まれ、問いに寄り添い、学びの実感を積み重ねる授業を実践することで、子どもの主体性、自己肯定感(自己受容感)・自己有用感を育んでいく。

教科指導力を含めた確かな授業力を持ち、子どもの思いや問いを引き出し、ゆさぶり、広げ、つなげ、焦点化することで、子どもが友達と関わり合いながら学びを深める授業を創造する教師集団をめざす。「個別最適な学び」と「協働的な学び」。主体性には必然性が伴う。

(2) 子どもが安心して新しい自分づくりに挑戦し、自己表現できる温かい学校風土をつくる。

教師が一番の教育環境であることを自覚し、人を思いやる心を育み、一人一人が友だちとの温かい関わりの中でのびのびと生活し成長できるようにする。そのために、学級をはじめ学校生活全体の中で子ども一人一人が一人の人間として大切にされているという実感をもつことができるようにすることで人権感覚を身に付けさせたい。

(3) 挑戦し続ける学校、信頼される強い組織づくりをめざす。

職員が互いに風通し良く情報や考えを交流（よこ展）し、常に工夫や挑戦をしていき、前向きで互いに信頼し支え合いながら業務を遂行していくことで、子ども・家庭・地域から信頼される強い職員組織をめざす。挑戦して初めて見えてくるものがある。

5 令和4年度学校経営ガイドライン

(1) 校訓 「健康でがんばる子」

「がんばる子」は、自らの意思でやろうとすることを表している。がんばられるのではない。自分が自分の夢や目標に向けて頑張っていこうとする主体的な子どもである。

(2) 学校教育目標 「あたらしい自分をつくっていく ぼく・わたし」

思いやりあふれる温かい環境の中で人権感覚、自己肯定感（自己受容感）、自己有用感を育み、子ども自身が積極的に自分の夢や希望を思い描き、その達成に向けて前向きに生活していく姿を目指す。子どもが自らの能力を引き出し、子どもが自らを育てる学校でありたい。

(3) 重点目標 「人にやさしい 人がやさしい」

多様性（ダイバーシティ）という言葉は、価値観や考え方、手段や方法の多様性だけでなく、Society5.0の時代は、生活のスタイルや社会そのものが多様化している時代である。世界では、紛争や貧困、国内においても、格差の拡大、自殺者の増加など、21世紀は「心の時代」ともいえる。校内においても、社会の縮図のように精神的に不安を抱える児童、保護者、また、教職員も様々な不安を抱えやすい時代である。そのような中、何が当たり前か、普通かと問われれば、明確な答はない。力の理論で物事が進めば、失敗が許されるどころか、少数派の意見は切り捨てられやすい。そして、様々なことがマニュアル化、デジタル化され、そこに温かな人間のぬくもりが失われていくような、人間味のない集団は作りたくはない。子どもたちだけでなく、保護者も地域の方々も教職員も、本校に関わる全ての人たちが、包摂性（インクルージョン）の考えのもと、温かいぬくもりを感じられる、人にやさしい学校、人がやさしい学校をつくりたい。「みんなちがって みんないい」学校や教室の中に、ものの価値や考え方は多様化し、「当たり前」は一人一人にとって違う。教育は、一人一人の中にある価値を尊重し、その価値に輝きを与え、一人一人を輝かせることである。本市では、4月から「子どもの権利条例」が施行される。「子どもと大人は、共に社会をつくり、幸せを分かち合うパートナー。」私たち教師、保護者、社会全体でその趣旨を生かして、一人一人の人権や人格を尊重して、愛情をもって子どもに接することで、子どもたちも他人に愛情をもって接するようになると思う。コロナ禍の中、人の命や人の心に向き合ってきた。結果として「学校が楽しい」と答える児童が増え、いじめやトラブル、不登校の減少につながっている。先にも述べたが、「人にやさしいとはどんなことか?」、「幸せとは何か?」、「生きるとは何か?」など、教育的な観点のみにとどまらず、「哲学」、「脳科学」、「心理学」、「経済学」、「法律学」等の観点からも学校づくりを総合的に見直し追求していける学校でありたいと思う。

(4) 学校教育目標に迫る教育構想 ル経営】

【Well-Being、いい加減のサステナブル経営】

① 温かく支え合い、高め合う学級・学年・学校づくり 「つくる」もの】

【学校は

『自分がされていやなことは人にしない、いわない。』（されていやなことはみんなちがう）

『自分にできることはやる、できないことはチャレンジする。』

・ 思いを行動に移す主体的な実践力を育む。(必然性のある子どもの主体性は学校の背骨)

(20%のゆとりが主体性を生む。失敗の許せる雰囲気づくりが、次なる挑戦を生む。)

・ 互いによさ、多様性(ダイバーシティ)を認め合える温かな仲間づくり。

(「みんなちがって みんないい」「寛容と協調性」「個と集団」「脱管理」「インクルージョン」)

・ いじめの起こりにくい学校風土の醸成と学年・学級経営。素早い組織対応。

(「いじめゼロ」も大切であるが、もっと大切なのは、「報告ゼロと組織対応」。)

・ 子どもの心(個性・特性)に寄り添う。人権。誰一人見捨てない包摂性(インクルージョン)。

(「×怒る」→「◎勇気づける、共に頑張る、苦手・特性を理解する」教師がモデルになる)

・ 「新しい自分をつくっていく子どもたち」を発見し、喜び、励ませ支援できる教師。

(「(家庭に帰る)子ども(の姿)が学級通信」「UD」「上からでなく横から目線」「相手意識(想像力)」)

② 自己肯定感(自己受容感)・自己有用感、思いやる心の育成 子ども理解】

【子

・ 道徳科、けやき学習、特別活動を3本柱として学年・学級経営を大切にしたい。

(「自己肯定感」が育たないのはなぜか?を教師が自問自答する。×減点主義→◎加

点評価)

③ けやき学習の充実 の主体性、必然性】

【子ども、教師

・ 子供が自らの問いをもち、目を輝かせ他と関わり合いながら追究していく。

・ 学級総合を基本とし、子どもが主体となり、教師も子供と共に学びを創っていく。

・ けやき学習の足あとを掲示。1年間の追究をまとめる。(けやきカレンダー、教科との関連)

・ けやき学習の理論が他教科・行事・委員会活動等に生かされる。(教師のカリマネ力)

④ 体験活動・実験・観察、豊かな言語活動 に子どもありき】

【はじめ

・ 子どもの思い「やってみたい」を大切に。思いのある活動からは学びが生まれ、つながる。

・ 子供自身による計画・予想・考察・振り返り。多くの人や企業(社会)、本物に触れさせたい。

・ 豊かな言語活動が、生活や人生を豊かで美しいものにする。学びの発信も大切にしたい。

⑤ ESD、SDGsを意識した取り組み かれた教育課程】

【社会に開

・ 持続可能な社会の創り手として、子どもたちが社会や世界に向き合い関わり合い、豊かな

人生を切り開いていくために求められる資質・能力とは何かを、教育課程において明確化

し育てていく。(ESD、SDGsを学ぶのではなく、探究したことが結果としてESD、SDGsへ)

- ・地域の人的・物的資源を活用し、社会と共有・連携しながら実現する。(人のかかわり、カリマネ)

- ・ユネスコスクールである本校のすべての活動や考え方が、ESD、SDGsの理念と重なり、

一貫性のある指導。(新学習指導要領の理念、子ども観、指導観、評価観・・・)

⑥ 学年連携、組織的対応 【「一人でやらない」「一人にしない」「あなたが大切」】

- ・学年全体をみんなで育てる(合同授業、教科担任・分担制等、全員が担任として関わる)

- ・そろえるところはそろえる(学校力の醸成、脱管理、×部分最適化→全体最適化、「しかけ」)

- ・本年度は学年部会の重視(水曜日)。行事、日課の学年運用。保護者・地域の授業参加。

- ・「連携」とは「安心できるつながり」。よこ展開して広げる。情報・コミュニケーション力。

⑦ 小・中一貫教育 【小中連携・一貫教育、コミュニティ・スクール】

- ・義務教育9年間を見通し、一貫した教育の充実を図る目指す子ども像。～たての接続～

- ・学校・家庭・地域が協働し、子どもを育てる学校づくり。～よこ(学校と地域社会)の連携～

- ・各中学校区の地域に根ざした特色ある教育を進める。～幼小中連携～

⑧ 危機管理、不祥事根絶 【危機管理は、学校の第一目一番地】

- ・「危機管理のさしすせそ」(最悪を想定し、真剣に、素早く、誠意をもって、組織で対応)

- ・「先に言えば説明、あとに言えば言い訳」、「報連相→報」、「正しいよりも効果のあること」

- ・危機管理研修の充実を図る。(重大事故ゼロ、不祥事ゼロ = 学校の信頼)

⑨ 仕事、行事、活動の見直し 【学校(学級)経営に正解はないが、不正解はある！】

- ・「正解主義→修正主義」「前例主義→先例主義」「事なかれ主義→事あり主義」と「真・善・美」

- ・「Chance Change Challenge」(3C)、「Information Interactive Insight」(3I)

- ・「NG思考 RISK管理 OUTLOOK(見通し)」(NRO)、透明感ある学校経営、情報発信

⑩ 働き方改革 【いい加減、働きがい改革へ】

- ・「働き方改革」と「働きがい改革」、「学校の当たり前」の見直し(社会との乖離) (「ハーズバーグの理論」のもと、単なる働き方改革でなく「働きがい改革」へ)

- ・大切にしたいこと、削減できること、統合できること、新しく取り入れたいことを、業務全体

を見据える中で取捨選択していく。新しい時代に即したPTAの改革の推進も図る。

- ・時間外勤務の上限の目安時間 ※自らの勤務時間を管理する。ワークライフバランス。

原則 月 45 時間以内、年 360 時間以内

特例 月 45 時間を超える月は年間 6 か月以内。月 100 時間未満。
ただし、連続する場合、その期間月平均が 80 時間以内とする。